

## <研究論文>「笑う写真」の誕生：雑誌『ニコニコ』の役割

著者	岩井 茂樹
雑誌名	日本研究
巻	61
ページ	45-67
発行年	2020-11-30
その他の言語のタイトル	The Emergence of Smiling Photographs : Focusing on the Role of the Magazine Nikoniko
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00007562">http://doi.org/10.15055/00007562</a>

# 「笑う写真」の誕生

## —雑誌『ニコニコ』の役割

岩井茂樹

はじめに

現在、写真を撮る時、我々は一体どんな顔をするだろう。証明写真などの公的な写真は別として、普段の写真、たとえば旅行先や、家族や友人とのスナップ写真では笑顔を無理にでも作って撮るのが自然なことだとは思っていないだろうか。こうした状況下で、笑みを浮かべていない写真はきわめて不自然な感じがする。

しかし、当然のことながら、こうした状況や感覚は写真が誕生した時から存在したわけではない。写真の歴史を繙けばすぐにわかるように、初期（幕末から明治時代初期）の写真は比較的長い露光時

間が必要であった。したがって、写真の前で表情や姿勢を維持すること自体が難しかった。たとえば、ある人が笑顔で写真に写りたいとたと思つたとしても、あるいは写真師が笑顔の写真撮りたいと思つたとしても、それはほとんど不可能に近いことであつたのである。では、いつから、どうして、笑顔の写真が登場し、それが定着していったのか。そういった疑問が生じる。

本稿は、日本において笑顔の写真（以下、これを「笑う写真」と称す）が、どのような事情によつて誕生し、普及していったのか、この点を明確化することを目的としたものである。ちなみに、この問題は写真研究史の中で、ほとんど看過されてきた問題であり、後述するように、若干の指摘はあるものの、深く考察されたものは、管

言う。

その頃の人々は笑って写真におさまっていない。なにかひどく、かしこまらなくてはいけない場面に人のする顔をしていたものだ。初期の写真が露光時間が長く、長いことジツとしていなければならなかった、のも一因だろうが、そういうことも含めて、写真を撮る時間というのが、特権的な時間、儀礼的空間であつたことと、これは関係している。<sup>(2)</sup>

つまり、初期の写真では技術的にも時間的にも、また空間的にも、とうてい「笑う写真」が現出するような状況ではなかったのだ、と言うのである。

この南の指摘を受けて、写真収集家で研究家の石黒敬章がこの「笑う写真」問題に取り組んだ。これが本稿に直接関係する唯一の先行研究であると言つていい。石黒は「笑顔の古写真は珍」として、次のように述べている。

## 第一章 笑わぬ写真

管見の及ぶ限り、最初に古い写真に「笑う写真」が少ないことを指摘したのは、作家の南伸坊であると思われる。南は、次のように

明治の古写真を蒐めてみて、かねがね思うことは、笑つてい  
る写真が少ないことである。

露光時間に数秒から数十秒を要した湿板写真の時代には、そ  
の間笑い続けることは難しかったというのが、普通に考えられ

見の及ぶ限りほぼ皆無であつた。本稿はこの疑問に答えようとするものである。本稿によって、「笑う写真」の誕生と定着に何が大きく影響したのかが明瞭になるだろう。この作業は、「大衆写真文化史」を構築する上で必要不可欠なものと思われる。現在、スナップ写真では「変顔」と総称されるように、わざと変な顔をして写真を撮り、それを保存したり、SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）などにアップロードしたりすることが一種の流行となつている。こうした芸術写真史とは別の「大衆写真文化史」が構築できないか、それを筆者は考えている。「笑う写真」も当時としては、「変顔」の一種だつたかもしれない。とするならば、「笑う写真」の登場は、「変顔写真」の元祖だつたとも言ひ換えることができるし、そうなれば、「大衆写真文化史」という名の下に、現代との連続性も見出せることだろう。こうした意味において、「笑う写真」の登場や定着に関する事項を明確化することは、近代および現代の写真のあり方と歴史、そしてひいては我々日本人にとつて写真とは何だつたのか、を考える契機となり得るであらう。<sup>(1)</sup>

る理由である。が、乾板が普及して露出が一秒の数分の一になつた明治中期以降も、やはり笑つた写真は殆ど見当たらない。単に露光時間の問題ではないようである。<sup>(3)</sup>

石黒は、明治時代の写真には、「笑う写真」が少ない、という。そして、その理由にはもちろん露光時間の問題もあるだろうが、どうやら原因はそれだけではなさそうだ、というのである。石黒はこの問題に関し、まず四つの仮説を立てている。それは次のようなものだ。

仮説一…写真師が「動くな」と言つた

仮説二…笑つて写すは下

仮説三…厳肅な時に笑うは不謹慎

仮説四…笑つた前例がない<sup>(4)</sup>

仮説を列挙しただけではわかりにくいと思うので、少しだけ補足を行つておこう。仮説一について石黒は、「おそらく、明治の写真師は撮影の前に、『ハイ、写しまーす・お動き遊ばしませぬように』と言つたのである。これでは笑えないのが当然である」とし、現在のように「ハイ、チーズ」と言つて撮影する術を知らなかつたからだ、としている。<sup>(5)</sup>

仮説二について石黒は、次のような説明をしている。

明治の時代は、男女を問わずゲラゲラ笑うことは卑しめられた。紳士は威厳をもつて人に接したものだし、笑うと尊厳が損なわれると思つたから、たえずニガ虫を嘔み潰したような顔をしていた。

淑女は、井戸端会議では大声を出して笑つたかも知れないが、公の場では、口に手を当ててホホホと微笑む程度だつた。当然写真館でも、笑うなどという行為は慎まなければならなかつた。<sup>(6)</sup>

明治時代には、男女を問わず笑うことは卑しい行為であつたため、写真館でも「笑う写真」は撮られなかつたのである、と言うのだ。

仮説三に移ろう。当時、「写真を撮るといふことは、写真館に行くこと」であり、「当時の写真館は、あえて写真撮影を厳肅なものに演出していた」と石黒は言う。<sup>(7)</sup>したがって、客は気後れしたり、失礼だと思つたりして、笑えなかつたのではないか、と言うのだ。

仮説四について、石黒は、

慣れていない人が写真館に行けば、写真師に言われるまま、見本写真の中から適当なものを選び、同じように撮ってもらうしかない。その見本写真の中に笑つた写真がなければ、自分が笑



うなどとは露ほども考えつかないのが道理である。(中略)

同様に明治の写真館では、笑った写真は慣れていないから、おかしいものだつたに違いない。こうしてすました写真のみが見慣れておかしくない写真として前例となり、後に写真館が林立して写真の安売り合戦が展開され、撮影が厳粛でなくなつても、あいかわらず笑顔はうつされなかつたのであろう。<sup>(8)</sup>

という説明をしている。前例や見本がなかつたから「笑う写真」が撮られなかつたというのである。

こうした仮説を立て、石黒はさらにもう一步踏み込んだ考察をしている。それは「笑子ちゃん」(石黒が命名)という女性の存在である。石黒によると、彼女が「笑う写真」を日本人に根づかせることに寄与した最大の功労者<sup>(9)</sup>であると言う。では「笑子ちゃん」とは誰か。名前などは一切わからないが、彼女の写真はいわゆる「横浜写真」<sup>(10)</sup>に相当数含まれており、これが世界中に広まつたのだ、と石黒は主張する。また「笑子ちゃん」の写真是写真絵葉書にも登場すると言う。彼女の貢献と、アマチュアカメラマンの台頭によつて、わざわざ写真館に行かなくてもよくなつたことで、「笑う写真」が普及したのだと石黒は主張するのである。「笑子ちゃん」の果たした役割を、石黒が年表風にまとめているので、それをここに引いておこう。

○明治二十〇三十五年 横浜写真に笑う「笑子ちゃん」登場。

○明治三十八〇四十五年 絵はがきに「笑子ちゃん」再登場(コロタイプ印刷手彩色)。

○明治三十八〇四十五年 「笑子ちゃん」以外の芸者絵はがきが販売される。

○大正時代 笑う美人絵はがきがオフセット印刷で量産される。笑つて記念撮影することが普及する。<sup>(1)</sup>

といった具合である。なるほど、「笑子ちゃん」によつて「笑う写真」の見本が出来た。これが見本となつて、大正時代に「笑う写真」が普及したと言うのだ。

ここで、すこし興味深い資料を紹介しておこう。小林弘忠は、石黒が示した仮説を受け、次のように述べている。

そうかもしれない。家庭のアルバムにある個人の写真をめくれば、おそらく時代を経るとともに笑顔が多くなつてきているであろう。大正一三年(一九二四)にはバスガール、タイピスト、理髪師などにつづいて写真師にも女性がかなり進出した(『明治大正昭和世相史』)というから、写真館で撮つた写真でも笑い顔がみられるようになったのは大正時代からといつてもいいかもしれない。

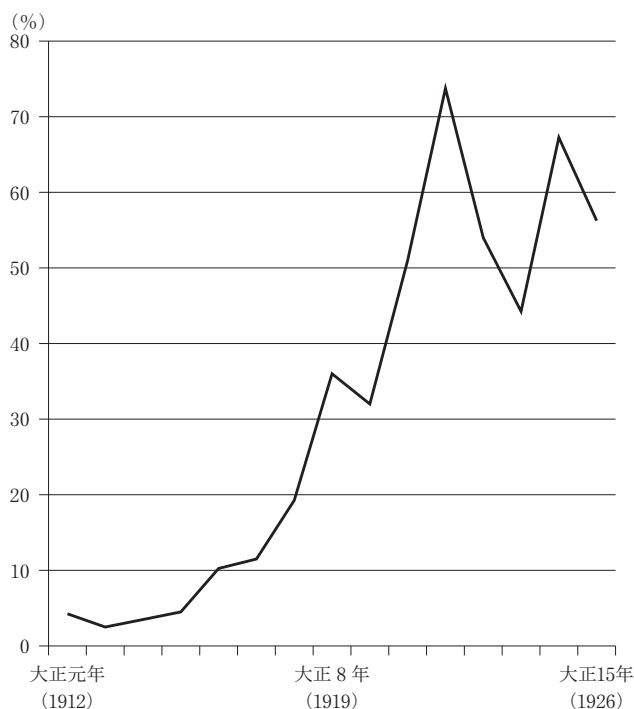


図 1：大正時代の笑顔率の変遷  
(小林弘忠『新聞報道と顔写真——写真のウソとマコト』中公新書、1998年、p. 204 表 6-2 をもとに筆者が作成)

新聞上の顔写真も、大正中期の六、七年ごろになると、街の人も軍人にもかなり笑顔がふえてくる。カイゼル髭をピンと立てた軍人の笑顔はなんだかおかしいが、髭のあいだから歯をみせているものもある。<sup>12)</sup>

そこで小林は、そうした傾向が実際に見られるのかを『東京朝日新聞』を用いて、検証を試みた。新聞写真に登場する「人物の中で

笑っている顔「笑顔率」を数値化し、その割合を算出したのだ。その結果をグラフにしたのが、図 1 である。

なるほど、この数値を見れば、大正時代に「笑顔率」が急増したことがわかる。とりわけ大正中期には新聞に掲載された人物写真の七割強が笑顔であった時代もあったことがわかる。一つの新聞の例ではあるが、ここからおおよそ大正中期に「笑う写真」が普及したであろうことが推察できる。

また婦人雑誌の分析を行った木村涼子も、次のような指摘を行っている。

一般に女性の笑顔が、写真に撮ったり、絵に描いたりする題材として認められるようになったのは、大正後期から昭和初期にかけての時期ではないかと考えられる。婦人雑誌のグラビアでも、一九三〇年代には女優や「〇〇令嬢」の写真などで歯を見せた笑顔はそれほど珍しいものではなくなってくる。<sup>13)</sup>

これらのデータや言説から判断すると、大正になって「笑う写真」が普及したという石黒の説は、どうやら正しいように思われる。だが、ここである疑問が生じる。石黒の言うように、もしかすると女性の見本は「笑子ちゃん」によって作られたと言えるのかもしれない。けれども男性の見本は一切なかったではないか。男性の「笑

「写真」も大正時代から多く見られるのに、男性は一体どういった見本によつて笑えるようになったのか。その点が明らかにされていない。ついでに言うならば、子供や老人たちの見本も「笑子ちゃん」ではなかったであろう。大正時代には階層や年齢を問わず、ほとんどの人に「笑う写真」が普及していたと言うのに、である。実は、ここには掲げないが、エドワード・モースがコレクションした明治時代の写真の中に、男女や子供などの「笑う写真」が数枚存在する<sup>①</sup>。これらの写真は、いずれも明治三十年代（日清戦争前後）のものであるとされている。それらはすべて一般庶民を写したもので、つまりもう少し詳しく言えば、労働者など、当時で言えば決して上層階級とは言えない人たちを写した写真ばかりである。したがって、男女に関してのみ言えば、笑顔に対する意識は、男女間でそれほど大きな差はなかったものと推察される。それよりも、おそらく当時の上層階級で笑顔を見せることはあまり好ましい行為ではないとされていたのではないかと思われる。

ちなみに、先に紹介した南伸坊は、「笑う写真」が登場し、普及した点について、次のような意見を述べている。

人々が写真の中で笑うようになったのは、おそらく芸人が写真に登場するようになってからではなからうか。役者や映画スターたちは、特権的時間や儀礼的空間に打ち克った、「余裕」を

演出した。そうして、次に、写真が少しずつゼータクでなくなり、写真の強制力は弱まってきた。しかし、そのすべてが、霧散し霧消してしまったというワケではない。写真はいまだに、モヤのように強制力を保持しているのである<sup>②</sup>。

だが、この説も説得力に欠く。なるほど、現在もスター気取りで写真を撮る者はいる。男性も女性も芸人たちを見本にしたかもしれない。しかしながら、その見本となる写真は必ずしも「笑う写真」だとは限らない。芸人や映画俳優も、明治時代には格好をつけた写真はあつても、「笑う写真」はごくわずかしが確認されていない。実際に彼らの「笑う写真」が世に広まるのは、一般人と同じく大正時代に入ってからのことであつた。だが、彼ら芸人たちにとつても何らかの笑つた写真見本や、笑う機会がまずは必要だつたはずである。

いずれにせよ、以上のことからわかることは、大正時代前後に何らかの大きな変革が起きた結果、「笑う写真」が登場し、それが急激な勢いで普及し、定着していったことである。もちろん、写真技術が発達し、簡単にスナップ写真が撮れるようになったというのも一因かもしれない。だが、それ以外にも要因はあつたのだ。それを次章以下で見てみよう。



図2：雑誌『ニコニコ』第47号表紙  
(1913年12月：筆者蔵)

## 第二章 雑誌『ニコニコ』の発刊と、ニコニコ倶楽部創設

「笑う写真」は、雑誌『ニコニコ』によって量産されたものである。その理由は後述するとして、この雑誌『ニコニコ』とはどんな雑誌だったのかという点を、まずは確認しておきたい。

雑誌『ニコニコ』については、常見耕平「貯金王牧野元次郎と雑誌『ニコニコ』」(現代風俗研究会東京の会編『現代風俗学研究』第七号、現代風俗研究会東京の会、二〇〇一年三月)が最も詳しく、雑誌『ニコニコ』について論じた唯一の論文であると思われる。常見は「本稿は、貯金王と呼ばれた牧野元次郎と彼が一九一一(明治四十

四)年に創刊した雑誌『ニコニコ』の研究である」として、「一人の経営者と一つのメディアを手がかりに明治末から大正初期にかけての風俗の一端をあきらかにしていこうというのが、この研究の目的である」としている<sup>⑬</sup>。常見の関心は、第二次世界大戦前に「貯金王」と呼ばれた牧野元次郎が、彼の尽力と後援によって創刊された雑誌『ニコニコ』によって、当時の風俗にどのような影響を与えたのかにある。ここには、また後で述べるように、『ニコニコ』に載せられた写真に関する記述があるが、常見は雑誌の特徴の一つとして述べているだけで、「笑う写真」の誕生については、一切言及していない。『ニコニコ』の口絵を幼児や子供、女性の笑顔や家族の写真が飾っている。これこそ平和で豊かな生活を具体的に示すものであった」と述べるにとどまっているのである<sup>⑭</sup>。

その他、この雑誌について比較的詳しく論じたものに、荒俣宏『広告図像の伝説』(平凡社、一九八九年八月)や、同『奇つ怪紳士録』(平凡社、一九八八年八月)、安食文雄『三田村鳶魚の時代』(鳥影社、二〇〇四年八月)などがある。これらの書物においても、「笑う写真」との関係は述べられず、その関心はもっぱら牧野元次郎な

いしは、彼の大黒天信仰にあった。

また、この雑誌自体も、これまで重要視されてこなかった。たとえ関心を持たれたとしても、夏目漱石が自らの「笑う写真」を撮られた雑誌として、取り上げられる程度でしかなかった<sup>⑮</sup>。

だが、本稿では、この雑誌が「笑う写真」に大きな影響を与えたものとして、その特徴や、その効果について詳しく論じる。

さて、『ニコニコ』は、一九一一年（明治四十四）年二月十一日（紀元節）に発刊された月刊誌である。発行元のニコニコ倶楽部は、『ニコニコ』の発刊と同時に創設された倶楽部であるが、本部は「東京市京橋区南金六町十五番地」にあった。「ニコニコ倶楽部の趣旨」は、以下の通りである。少し長いので三つの部分に分け、順に見ていくことにしよう。第一段落には次のような文言が見える。

現代の如く生存競争の激甚なる渦中に投ぜし国民は不知不識悲観的思想に囚はれ、あるひは歎き、あるひは悶え、一生を悲歎と憤懣とに終り候事国家の為発慮致す可き事と思考仕りニコニコ主義鼓吹に勤め来り申候。<sup>19</sup>

現代のような生存競争の激しい時代には、国民は知らず知らずの内に、悲観的思想に囚われたり、歎いたり、煩悶したりして、一生を悲歎と憤懣で終えてしまう。それは国家の為には憂慮すべきことであると考え、ニコニコ主義を鼓吹することにした、と言うのである。ニコニコ主義については第三章で説明することにして、続く第二段落を見てみよう。

このことは一千九百七年十一月米国に於ても財界不況のため、人心漸く悲観的の傾向に陥り候を、今の大統領タフト氏会頭となり、当時の大統領ルーズベルト氏総裁となり、一代の富豪カーネギー翁及び英国の大楽天家ハーリーラウダー氏の両氏副会頭となり

総て汝の悲を葬れよ……！！

只ニコニコせよ……！！

と絶叫し、人心救済の事に努め来り候由。吾ニコニコクラブの目的も亦、之れに外ならず、

続く部分にはニコニコ倶楽部発足のきっかけが記されている。この倶楽部にはモデルとなる倶楽部があつたことがわかる。一九〇七（明治四十）年、アメリカでは財政不況が原因で、人心が次第に悲観傾向になつてきた。それを感じた当時の大統領タフトが倶楽部の会頭となり、前大統領のルーズベルトが総裁となつて、アメリカの大富豪・カーネギーやイギリスの楽天家・ハーリーラウダーが副会頭となつて、「総て汝の悲を葬れよ……！！ 只ニコニコせよ……！！」と絶叫して人心救済に尽くしたと言う。日本のニコニコ倶楽部の目的もこれと同じである、と言うのだ。一九〇七年にアメリカで人心救済のために創設された倶楽部を手本にして、その四年後にニコニコ倶楽部が作られたことになる。ちなみに、こ

ここでお手本とされたアメリカの倶楽部とは、Optimist Clubという倶楽部である。<sup>20</sup> 発刊の少し前の一九一一（明治四十四）年一月十四日付『読売新聞』第三面に、これに関連する記事が見られるので、紹介しておこう。

#### ▲ニコニコ倶楽部の創立

楽天主義の奮闘家として有名な不動貯金銀行頭取牧野元次郎氏は今回同志と謀り新橋南金六町の十五にニコニコ倶楽部を組織し来る二月十一日の紀元節を以て其機関ニコニコ雑誌を発行すべしといへるが米国にも一二年以前よりこのニコニコ倶楽部ありてルーズベルト会頭となりカーネギー翁又之を援け会員今や二十五万を算すといふ<sup>21</sup>

ここからこの倶楽部の創設、ないしは雑誌『ニコニコ』の発行が、不動貯金銀行頭取・牧野元次郎という人物の主導によつて行われたものであったことがわかる。またアメリカにも同じような倶楽部があり、その会員数は二十五万人を数えるということもわかる。

最後の段落には、現在の会員数などの情報が記されている。

今や創立漸く一歳にして、疲れたる国民の心機一転、楽天の境地におもむかんと吾ニコニコ倶楽部の門に走せ集る会員実に無

慮三万人を算し候。

ニコニコ主義は実に千古不磨の一大真理絶体不可抗の福音に有之。決して滑稽諧謔のみを弄するものにては無之この際奮つて御入会を望み申候。

倶楽部発足後、ようやく一年が経った。その間に疲れた国民は心機一転して、楽天の境地におもむこうとして多くの人々が参加し、その結果、ニコニコ倶楽部の会員数はおよそ三万人になった、と言うのである。このニコニコ主義は不変の真理、抗うことのできない福音である。決して滑稽や諧謔のみを弄ぶものではない。したがってこの際、さらに奮つて入会を希望する、という旨のことが書かれている。先述したようにアメリカには二十五万人の会員がいた。これは一、二年間かけて大きくなったものだ。これには及ばないものの、一年で三万人というのも、かなりの成果と言えるのではないだろうか。

次にこの倶楽部の会則、「ニコニコ倶楽部会則」の一部を引いてみよう。

▲本会は現代人心の萎微墮廢、危険思想及悲觀的傾向を打破し楽天的美風の鼓吹に努め、人生を幸福の境地に導くを以て目的とす。



▲本会はニコニコ倶楽部と称し、本部を東京市京橋区南金六町十五番地に、支部を各地枢要の地方に置く。但地方支部長は名誉会員又は本会に功勞顯著の特志家を推薦し支部規則は別に之を定む。

▲本会会員は不平、煩悶、悲哀の念を去りニコニコとして快活に事業、社交に奮闘勤勉する男女を以て組織す。

▲会員は常に福德円満の祖人大黒天を崇拜し、毎朝今日一日の座右銘を三唱し何事もニコニコとして君恩を忘れず、家内睦じく、国家の富強、子孫の繁榮長久を祈る可き事。

▲本会の主義鼓吹機関として、毎月一回雑誌ニコニコを発行し、無代償にて会員に配布す。

▲本会は随時ニコニコ講演会を開催し、ニコニコ主義を鼓吹するものとす。<sup>22)</sup>

第一条は先に趣旨のところで見たものと同じである。第二条からは各地に支部が置かれ、その支部長は、ニコニコ倶楽部の名誉会員か、もしくはニコニコ倶楽部に功勞が顯著に見られる篤志家が推薦され、その中から選ばれるということが書かれている。第三条は、この会の会員は皆、不平や煩悶、悲哀の念を去つて、ニコニコとして事業や社交に奮闘勤勉する男女で組織されるということが記されている。第四条は少し異質である。会員は常に福德円満の神である

大黒天を崇拜して、毎朝「今日一日の座右銘」を三唱して、何事にもニコニコして取り組み、君恩を忘れず、家内の円満、国家の富強、子孫繁榮などを祈るべきである、と言う。この条については、「ニコニコ主義」と同様、説明が必要なので、次章で説明する。

今、重要なのは、第五条と第六条である。まず第五条であるが、ニコニコ主義の鼓吹機関として毎月『ニコニコ』を発行して、会員には無料で配布する、と言うのだ。先にこの時点（一九二一（大正元）年）で会員数はおよそ三万人いたので、最低でも毎月三万人の人々がこの雑誌を見ていたことになる。第六条は、随時講演会を開催し、ニコニコ主義を鼓吹するというものである。講演会には多くの人が訪れる。その人たちに、講演会という機会を通じて「ニコニコ主義」を鼓吹しようと言うのである。

### 第三章 「ニコニコ主義」と大黒天信仰

ここで、写真とは少し話が逸れてしまいが、前章で取り挙げた「ニコニコ主義」と大黒天信仰について説明しておかなければならない。なぜなら、これが、「笑う写真」に大きな影響を与えるからである。またこの二つは不可分の関係にあるから、どうしても両者の説明が必要になる。

それでは、「ニコニコ主義」とは何だろう。これは当時不動貯金

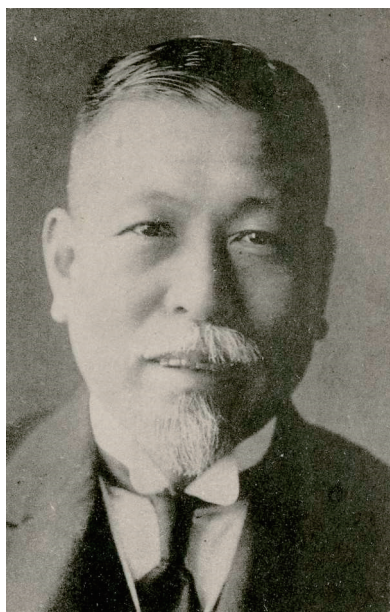


図3：牧野元次郎肖像写真  
(牧野元次郎『ニコニコ全集』弘学館書店、1927年より転載)

銀行の頭取であり、ニコニコ倶楽部の会頭であつた牧野元次郎(図3)が提唱し始めた主義である。

牧野は次のように言う。

予は年来ニコニコ宗の信者である、世の中の事は総てニコニコ的に解決するを要する、平和も成功も皆此ニコニコ主義より生ずるものと信ずる、ソコで予は折もあれば絶えず此ニコニコ主義を鼓吹して居つた、此主義天下にはびこれば彼の忌むべき無政府党は無くなるのである、ボイコツトも生じないのである。<sup>(23)</sup>

この主義は、社会の不満や問題をニコニコ的に解決するというものである。この主義が社会に蔓延すれば社会は平和になり、皆成功

をおさめることができ、すべてが円満に治ると言うのである。

続けて牧野は言う。

ソコデニコニコ主義とは何ぞやと云ふに、大黒天の風貌そのまゝである、<sup>(24)</sup>

ニコニコ主義とは「大黒天の風貌そのまゝである」と牧野は言うのである。

さらに「大黒天の顔を拝するに、其ニコニコしたる高風や真に欽すべきで、今試みに此ニコニコを解剖すれば」として、三つの意味をそこに見出している。それは、

- 一、心の平和を意味する      一 少しも邪念なし、不平なし――
- 二、身体の強健を意味する      一 少しも病氣なし、長寿なり――
- 三、事業の成功を意味する      一 少しも失敗なし、福德全し――<sup>(25)</sup>

というものである。大黒様のようにニコニコすれば、心が平和になり、身体は強健になり、事業も成功すると言うのだ。このように牧野はニコニコ主義を鼓吹したが、次のようなことも述べている。

ニコニコ主義を鼓吹して居る人間であるから定めしニコニコし



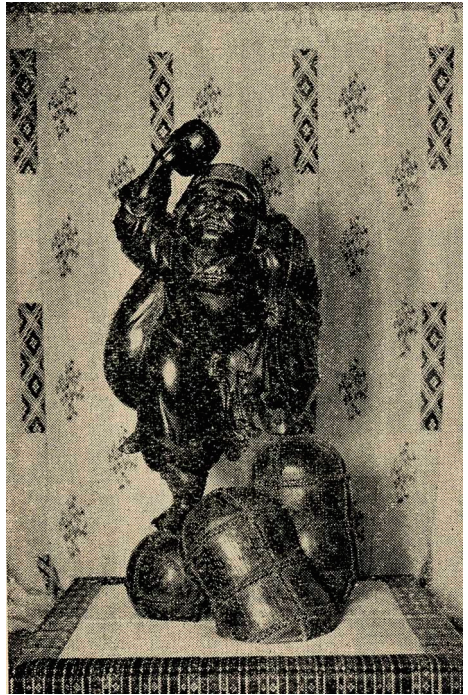


図4：不動貯金銀行本店の大黒像  
(武者小路実篤『牧野元次郎』学芸社、  
1935年12月、口絵より転載)

た大黒様のやうな男であると思ひなさんと大変御考へ違ひで、  
元来ニコニコ主義を唱へますのはニコニコして居りませぬ非ニ  
コニコの人物であるから特に其の必要を感じたのであります、  
それでどうか一種の研究若くは修養方法として此のニコニコ主  
義に付いて出来る限り研究もし修養もして、どうか成るべく大  
黒様に近寄りますやうに希望を持つては居りますけれども、そ  
れは前途甚だ遠いのでありまして、(後略)<sup>26)</sup>

牧野は元来、ニコニコした人間ではない。元来は非ニコニコの人  
間なので、ニコニコする必要を感じたのだ、と言う。つまり、牧野  
にとって、ニコニコ主義を実践し、大黒様のようになるということ

は、自らの目標であり、修養でもあつたのである。  
なるほど、大黒様はニコニコしている。だが、なぜ大黒様でなく  
てはならないのだろうか。これは牧野の体験に由来する。

牧野は一九〇五年の正月に伊勢神宮へ出掛け、帰りに土産物を買  
おうと店に立ち寄つた。そこに「極く粗末な木彫の大黒様」が「十  
二銭五厘」で売つていた。「其の大黒様を見て居りますと、非常に  
快感を覚えますので、是非之を一つ買つて行きましやう」という考  
えが起こり、「外の物は何も買ひませんで十二銭五厘の大黒様一つ  
を土産に持て威張つて東京に帰つた」<sup>27)</sup>。帰りの汽車の中で大黒様の  
顔を見ていると、大黒様がニコニコと笑つているように見え、その  
顔には先に述べた三つの意味が読み取れた。それ以来、牧野は自  
分も大黒様のようにニコニコした主義でなければならぬと思ひ、  
様々な修養の方法を考えたと言う。その過程で制定されたのが、前  
章で出てきた「今日一日の記(今日一日の座右銘)」である。この座  
右銘とは次の三条である。

- 一、今日一日三つの恩を忘れず不足の思ひを為さぬこと
- 一、今日一日腹を立てぬこと
- 一、今日一日嘘を言はず無理を為さぬこと<sup>(28)</sup>

ちなみに、第一条の「三つの恩」とは、君恩、親に対する恩、そ

して師の恩を指す。牧野は、この座右銘を制定し、以後毎日三唱し続けたと言う。以後、牧野の個人的な大黒天信仰は、貯蓄銀行の経営にも敷衍され、不動貯金銀行は戦前の貯蓄銀行では最大の銀行にまで成長した<sup>(29)</sup>。

この大黒天の笑顔に触発された牧野が、やがてニコニコ倶楽部を創設し、雑誌『ニコニコ』をその機関誌として用いて、ニコニコ主義を鼓吹したのである。

では、その機関誌『ニコニコ』にはどんな特徴があったのだろうか。「笑う写真」が増加する原因は何だったのか。それを次章で見よう。

#### 第四章 雑誌『ニコニコ』の特徴と役割

図5は、雑誌『ニコニコ』発刊を告げる新聞広告である。この広告に雑誌『ニコニコ』の特徴がよく表れているので、少し丁寧に見ていこう。

まず上段には、政治家も、教育家も皆ニコニコせよ、という呼びかけが見える。どんな身分の人も、どんな職業の人も、また男女も問わず、とにかく皆、「ニコニコせよ」と言う。

下段に目を移そう。ここでもつとも注目すべきは、表紙や写真、掲載文、短歌、俳句や絵画などに懸賞をかけて、広く公募をしている

ることである。専門家でなくてもよい。ニコニコするようなものなら何でも大歓迎。そういつた楽しげで、かつ広く開かれた雰囲気を感じさせる広告である。写真に限ると、「何んてニコやかな福々しい顔なんだらうと言ふのを喜ぶ」とある。

ところで、常見耕平は、雑誌『ニコニコ』における誌面作りには、五つの表現パターンが見られることを指摘している。その部分を引用しよう。

第一は、ニコニコ写真である。さまざまな人物のニコニコ顔の写真が誌面を飾った。第二が、有名人の活用である。これには、有名人によるニコニコ主義への賛同、有名人のニコニコぶりといったものがあつた。第三は、実例の紹介である。ニコニコの

**雑誌『ニコニコ』の出現 見よ看よ**

△政治家もニコニコせよ △人生にニコニコ主義は或大なる真理の見地より尤も眞面目に福徳圓滿のニコニコ主義を鼓吹す可く  
△教育家もニコニコせよ △宗教家もニコニコせよ △雑誌『ニコニコ』發刊に當り左記の懸賞募集を爲す振  
△商人もニコニコせよ △銀行家もニコニコせよ △つて投稿あれ  
△官吏もニコニコせよ △官吏もニコニコせよ △表紙圖案  
△美術家もニコニコせよ △美術家もニコニコせよ △文藝  
△文藝家もニコニコせよ △文藝家もニコニコせよ △文藝  
△藝術家もニコニコせよ △藝術家もニコニコせよ △文藝  
△夫人もニコニコせよ △夫人もニコニコせよ △文藝  
△令嬢もニコニコせよ △令嬢もニコニコせよ △文藝

△本誌定價 初刊二月十一日紀元節本誌『ニコニコ』にて發表  
△本誌定價 初刊二月十一日紀元節本誌『ニコニコ』にて發表  
△本誌定價 初刊二月十一日紀元節本誌『ニコニコ』にて發表

△ニコニコ倶楽部  
東京新橋角金六町十五番地  
電話三三〇〇 四九

図5：『ニコニコ』発刊広告  
（『読売新聞』1911年1月14日朝刊  
第1面）

効能を説くことや世の中のニコニコぶりの紹介であった。第四は、ニコニコ・イベントの紹介である。ニコニコ倶楽部が開催したニコニコ・イベントを誌面に紹介するものであった。第五が物品販売である。ニコニコ倶楽部代理部が貯金箱から自転車までいろいろな品物を販売する仕組みであった。<sup>⑩</sup>

この内、本稿で特に問題となるのは、第一のポイントである。常見はこう言う。

『ニコニコ』の初めを飾るのがニコニコ写真である。毎号のように著名な政治家や実業家のニコニコ顔の写真が掲載される。第一号では、伊藤博文、桂太郎、渋沢栄一、大倉喜八郎のニコニコ顔が登場する。著名人だけではない。子供のニコニコ顔や美人のニコニコ顔が登場する。また、牧野元次郎家の家族写真や不動貯金銀行の幹部やその家族の写真もしばしば誌面を飾っている。(中略)

口絵写真だけではない。誌面のそこにニコニコ顔の写真が掲載されていた。<sup>⑪</sup>

実際に発行された雑誌を見てみると、確かにどの号にも最初に口絵としてニコニコとした写真が掲載されている。また記事本文中に

も投稿と思われる「笑う写真」が多数載せられているのである。荒俣宏も「毎号のせられる各界名士がニコニコ笑っているグラビアが評判をよんだ」と述べている。<sup>⑫</sup>明治時代の最末期から大正時代にかけて「笑う写真」が急増した原因の一つに、この雑誌の発行があることは、まず間違いないものと思われる。

では『ニコニコ』は、当時どのくらい人気があったのだろうか。いくら『ニコニコ』において「笑う写真」が急増しようが、そこに全国的な広がりが必要ならば、世に「笑う写真」が広まったとは断言できない。したがって、『ニコニコ』がどのくらい読まれたのかを知る必要がある。

以下、『ニコニコ』の人気ぶりがわかる資料をいくつか見てみることにしよう。まずは証言から。牧野元次郎の秘書であり『ニコニコ』の記者であった天沼雄吉の回顧録を見ると、「編集後記」を執筆担当した小原孝夫という人物が、次のような証言を残している。

事実、当時日本一の発行部数を誇っていた実業の日本社の「婦人世界」は月八、九万部のころですから「ニコニコ」の七万部は、これに次ぐものとして、その急成長ぶりに内外を驚嘆させたものでした。<sup>⑬</sup>

引用部分以外の箇所から、これは一九一六(大正五)年のことだ

表1：雑誌の閲覧回数

雑誌名	5月閲覧回数（回）
中学世界	454
中央公論	298
学生	293
雄弁	279
実業之日本	262
ニコニコ	248
冒険世界	243
太陽	238
日本及日本人	231
演芸画報	229

（竹内善作「定期刊行物礼賛」『市立図書館と其事業』第39号、東京市立日比谷図書館、1927年1月、pp. 3～4をもとに筆者が作成）

ということがわかる。当時日本一の発行部数を誇っていた『婦人世界』に次いで、『ニコニコ』は七万部を発行していたという。

他の資料を見てみよう。竹内善作が一九一六年五月に、一橋図書館で閲覧記録をとっている<sup>⑭</sup>。この記録の一部を抜粋し、まとめたのが表1である。

竹内は同年六月にも同様の調査を行なっているが、その結果も表1とあまり大差ない。特に『ニコニコ』に関しては、あまり差は見られない。いずれも上位十位以内に入っている。この調査では婦人雑誌は調査対象外とされているので、婦人雑誌を入れるともう少し順位は下がるかもしれないが、『中央公論』や『実業之日本』、それに『太陽』などのメジャーな雑誌とはほぼ同程度の閲覧回数があるのは非常に人気があつたからであろう。常見は指摘していないが、

『ニコニコ』が総ルビであつたことも、広く読まれた一因であつたのではないだろうか。総ルビは『ニコニコ』だけの特徴とは言えないものの、総ルビにすることによつて、大人から子供まで、男も女も楽しめる雑誌となつた。このことも好評を得た一つの要因であつた、と筆者は考える。

『ニコニコ』の広がりを考える上で参考になると思われる資料をあと二つ紹介しよう。

一つは明治から大正時代に活躍した教育者・村上专精に関する逸話である。

私は嘗て歯を痛めて歯医者の処へ行きました、処がその応接室の卓上にニコニコといふ雑誌が乗つて居ました、どうせ碌なものじゃ無いと馬鹿にしては居ましたが、治療を待つ間の退屈まぎれにフト手にして其口絵の写真を見ました処が、何がなしに引きつけられてツイ我知らずニコニコ為出しました、それから目次を調べ、記事の二三篇も読んで見て、予想に反し価値の甚だ大なるものあるのに驚かされました。其後雑誌は益々盛んになるといふ評判を聞きながら、ツイ沁み沁みと精読する機会もありませんでした、（後略）<sup>⑮</sup>

村上が歯を痛めて歯医者に行つた時、その応接室に『ニコニコ』





図6：ニコニコ絵葉書3種（筆者蔵）



図7：雑誌『ニコニコ』の口絵（『ニコニコ』第19号（1912年9月号）より転載）

が置いてあった。初めは馬鹿にしていたが、開いてみると口絵の写真にまずはニコニコさせられた。それから中身を見たが予想に反して価値が大きいものであることに驚かされた、と言うのである。ここでは、歯医者 の 応接室にまで『ニコニコ』が置かれていたこと、そしてその口絵の写真によって村上が思わずニコニコさせられた、という事実 に 注目すべきである。『ニコニコ』の広がり、影響力を物語る逸話であろう。

もう一つの資料を紹介しよう。中野重治の『歌のわかれ』に次のような箇所がある。主人公の片口安吉が、自分が選んだ文学部で倫理の講義を受けた時の話である。

順番最後に彼は倫理を聴いてみた。これが一番はじめであった。建築工事の音の がんが ん 響けてくるなかで、ドアをはいつてきた作田博士をひと目みた瞬間安吉は心からがっかりした。ギリシヤ人がほんとうに正しかったとすれば——彼はいつかそういうことを何かの抄訳本で読んでいた——こういう容貌の人によつて講義される倫理というものはありえなかった。にこにこ顔の教授の顔は「ニコニコ<sup>がすり</sup>紺」や雑誌『ニコニコ』を安吉に連想させた。<sup>(36)</sup>

倫理の講義をした作田博士は、にこにこ顔の教授であったと言

う。その顔は「ニコニコ<sup>がすり</sup>紺」や雑誌『ニコニコ』を連想させるものだったと言うのである。『歌のわかれ』は、一九三九（昭和十四）年、雑誌『革新』に発表された小説で、中野の自伝小説とされる作品である。彼が東京帝国大学独逸文学科に入学したのが、一九二四（大正十三）年のことであるから、この記述もその頃の思い出と見ていいだろう。「にこにこ顔」＝「雑誌『ニコニコ』」という連想が、当時は広く共有されていたことが、この一文からわかる。それはおそらく雑誌『ニコニコ』の口絵写真や、記事内に挿入された多数の「笑う写真」の影響であろう。

ちなみに、『ニコニコ』の口絵や本文中に掲載された「笑う写真」の一部は、『ニコニコ写真帖』（一九二二年九月）としてニコニコ倶楽部から、毎年増補されながら発売された。

## 第五章 雑誌『ニコニコ』の効果

ここまでで雑誌『ニコニコ』が、口絵や記事の中で「笑う写真」を使用したことによつて、「笑う写真」が急増し、それが雑誌の広まりとともに「笑う写真」が普及した、という旨のことを述べてきた。

では、実際にそのような証言はないものだろうか。一九二八（昭和三）年十月二十二日、牧野元次郎は高知市第三小学校において、

「貯金とニコニコ」と題する講演を行なった。そこで彼は次のようなことを語った。

今日「ニコニコ」が一つの名詞みたいになつたのはこれは今から二十三年前に私が「ニコニコ雑誌」を出してから初まつたのであります、それまでは写真を撮りますにも皆が六ヶしい、おさまつた顔をして写真を撮つてをりました、写真で笑つてゐるのなんか昔はありませんでした、「ニコニコ雑誌」を発行して雑誌に出すために笑つた写真を撮つた其が初まりで「ニコニコ雑誌」に掲げてあるものは笑つた顔ばかりであります、なかなか笑はない山本権兵衛伯の如きも笑はれました、

当時、「ニコニコ」という語が名詞のようになつたのは、雑誌『ニコニコ』を出してからだと牧野は言う。『ニコニコ』が発行されるまでは、皆が難しく、大人しい顔をして写真を撮つていたし、笑つた写真などなかった。だが、『ニコニコ』に笑つた写真を載せようとしたのがきっかけとなつて、この雑誌に掲載されている写真は、すべて笑つたものばかりである。容易には笑わないと言われた、あの山本権兵衛も笑つたのだ。そう牧野は強調するのである。

また、牧野の成功譚を書いた星野竹里も、同様の記述を残している。

頭取はニコニコ宗たらんには、ニコニコとなるべき土台が必要であつて、その土台を作る方法を布教し、宣伝せんとするのである。

そのためには、明治四十四年二月から大正六年の九月まで、巨万の資をつぎ込んで、雑誌「ニコニコ」を発行した。これが当時の人心に痛く共鳴して、大変な勢で売れた。さうして毎号、凡ゆる人達のニコニコ顔を写真に撮つて雑誌に掲げた。山本権兵衛伯も、東郷元帥も、乃木將軍も、それらどんなに鹿爪らしい、恐つかない顔の持主でも、ニコニコ雑誌社のカメラに向つては、どうしてもニコニコせざるを得なかつたのである。それ以来、笑つた顔の写真が流行りだしたが、それまでは笑ひ顔の写真は、わが国では殆んど見ることが出来なかつた。これもまた牧野頭取の創作の一であると言ひ得やう。

内容は牧野の言とはほとんど変わらない。ここでも、『ニコニコ』が世に出るまでは、笑つた顔の写真はなかつたこと、そして『ニコニコ』の発刊以降、「笑う写真」が流行し出したことが書かれている。普段は難しい顔をしている山本権兵衛や東郷平八郎、乃木希典なども、この雑誌の効果によつて笑つたのであり、そうした現象を引き起こしたのも牧野の「創作の一」であると、星野は述べているのである。



少し違った意見も紹介しておこう。明治から昭和にかけて活躍した政治家・横山勝太郎の意見である。彼はある席上で次のように演説した。次に掲げるのはその一部である。

諸君！ニコニコ雑誌なるもの、一号より御覧になつたお方はよく御承知で御ざいませう、上は公爵より、下は平民に至るまで、或は華族の令嬢であるとか、或は陸軍大将であるとか、或は芸者であるとか、役者であるとか、相撲であるとか、有ゆる階級の人の写真を掲載されました、所がニコニコ雑誌に出て居る写真なるものは、いかなるもので有りましたか、公爵の写真なりといひ、令嬢の写真なると称するものが、我々が見れば鬼が笑つて居るやうな体裁であります、我々日本人の顔面の美観を破壊する事、茲に十年、斯くの如く沢山の人間の顔を轢き殺したニコニコ雑誌なるものが、今日此頃漸く廃刊するに至つたのは、寧ろ廃刊が遅かつたのである<sup>(10)</sup>

横山は、雑誌『ニコニコ』には、あらゆる階級の人の写真が載つたが、それらは自分たちから見れば鬼が笑っているやうなものであり、それらは自分たち日本人の顔の美観を破壊し、多くの顔を轢き殺したのだ、という。『ニコニコ』に載せられた写真は、確かに「笑う写真」を増やしたが、それは必ずしも好意的に受け止められ

たわけではないことが、横山の発言からわかる。

ただ、いずれにせよ、「笑う写真」の誕生にもっとも貢献したのは牧野であり、また雑誌『ニコニコ』であつたことに変わりはない。『ニコニコ』に「笑う写真」が増加した主たる要因は、言うまでもなく『ニコニコ』の趣旨に沿つて、編集者や記者たちが笑顔を要求したからであつた。ただ、それ以外にも要因はあつたようだ。それは『ニコニコ』のカメラマンの資質である。次の文章を見て欲しい。これは『ニコニコ』の記者をしていた天沼雄吉が、林嘉陽というカメラマンのことを語つた文章である。

彼は失礼だが、どうみても好男子とはうけとれぬ。むしろはつきり醜男といわれる部類に属するご仁である。しかも生来の眇目は、一層それを際立たせ、その動作のひとつひとつに一種いうにいわれぬ滑稽味があつた。

だが、天は彼に、卓越したカメラマンとしての資質を与えてくれたのである。撮影までの間のとり方、瞬間の呼吸のとらえ方はまさに彼ならではの入神の技があつた。ことにシャッターをきる直前の「ちよつと、ニコニコ願います」というあたりの彼の巧まぬしぐさには、どんな気難かしいご仁でも、面相を自然はごさずにはおれないものがあつた。<sup>(11)</sup>



林はあまりルックスがよくなかった。というよりも、他人に滑稽ささえ与えるような顔であつたと言う。だが、それが「笑う写真」を撮るときには役立った。彼の仕草にはどんな気難しい人物でも、相好を崩さずにはいらなかった、と言うのである。

こうした要素が重なり、「笑う写真」は誕生し、次第に定着していったのである。

## おわりに

以上のような考察によつて、牧野元次郎が主導して作つたニコニコ倶楽部と、雑誌『ニコニコ』が「笑う写真」を誕生させ、定着させるのに寄与した可能性が高い、ということが明確になつたと思う。『ニコニコ』は一九一七（大正六）年十月号、八十一号をもつて廃刊になつた。同時にニコニコ倶楽部も解体される。廃刊になつた理由は、雑誌が売れなくなつたからではない。むしろ『ニコニコ』はこの時も順調に部数を伸ばしていた。

『ニコニコ』が廃刊になつた理由は、ニコニコ倶楽部の理事であり、編集長でもあつた松永敏太郎の心変わりにあつた。『ニコニコ』のパトロンの存在であつた牧野元次郎に逆らい、謀反のような企てをしたからである。松永はその後「非ニコニコ主義」「あきらめ主義」を標榜。林田雲梯、村上浪六と共に「あきらめ倶楽部」（ど

んな事も「諦念」が大事であると標榜する倶楽部）を創設し、一九一八（大正七）年四月から『夢の世界』という雑誌を発刊する。この雑誌は翌年十月号まで計十九冊を出して終刊となる。複雑なのは、ここから松永がまたニコニコ倶楽部を再創設し、雑誌『ニコニコ』を刊行し始めたことである。『ニコニコ』の一〇一号以降は、この「第二期」とも言うべき時代であり、本稿で紹介した『ニコニコ』とは内容や目的などが異なるものとなつてしまふ。口絵などには「笑う写真」が使われているが、記事には初期の頃のような活気と楽天的な雰囲気があるで感じられない。当時刊行されていた他の雑誌と変わらないような特徴のない雑誌になつてしまつた。そしてついに、第二期『ニコニコ』も一九二一（大正十）年九月号をもつて書店販売が中止され、十月号からは注文販売になつてしまふ。<sup>12</sup>『ニコニコ』という雑誌は、その後また牧野の不動貯金銀行が小冊子として発行することになり、「笑う写真」もほとんど掲載されなくなつてしまつた。彼の「ニコニコ主義」鼓吹のための講話が連載されている点だけが、初期の『ニコニコ』と重なるところである。

したがつて、「笑う写真」の誕生と定着は、初期、つまり一九一七年十月号までの『ニコニコ』に負うところが多いと言えよう。初期の『ニコニコ』は、有名・無名を問わず数多の人々の笑顔写真を掲載した。それが手本、いやもしかすると一つの流行となつて「笑う写真」が急増していったのではないだろうか。

「はじめに」のところで述べたように、本稿は「大衆写真文化史」を考えるための論稿である。いわば「大衆写真文化史」を考えるための第一歩とでも言うべきものであろうか。この雑誌『ニコニコ』の分析をもとに、「大衆写真文化史」全体を今後、検討していきたいと思う。

もちろん、「大衆写真文化史」を構築するには、今後、膨大な作業が必要となるが、雑誌『ニコニコ』に関するだけでも、本稿で述べられなかった問題は少なくない。もともと大きな問題としては、本文中で述べた Optimist Club の実態がどのようなものであったのか、そしてどこまでを手本としたのか、というものであるが、これは現在調査を進めている最中であるため、別稿に譲りたいと思う。もう一つ今後行いたいことは、写真技術の発達との関係性を解明することである。写真技術や写真機の発達が、「笑う写真」にどのような影響を与えたのか、そうした問題も合わせて考えてみたい。また雑誌『ニコニコ』以外の要因としては、この雑誌の後の時代（大正中期以降）に、アメリカから大量に輸入され、上映された喜劇映画の影響も考えられる。こうした喜劇映画のスクリーン写真は多くの雑誌にも転載された。こうした転載が「笑顔写真」の定着にも一役買ったであろうことは想像にかたくない。したがって、このあたりの実態についても今後明らかにしていく必要があるだろう。

注

(1) なお、本文中の引用文は、読みやすさを考慮して現在通用している漢字に改めたこと、同じ理由により句読点を適宜補うと同時に、太字やフォントの異なる箇所を改めたこと、二字以上の繰り返し記号はそれに該当する文字を当てたこと、ルビは繁雑にならない程度に制限したこと、をあらかじめ断っておく。

(2) 南仲坊『笑う写真』ちくま文庫、一九九三年十二月、十八頁。

(3) 石黒敬章『幕末・明治のおもしろ写真』平凡社、一九九六年十月、四頁。

(4) 同前、十～十四頁。

(5) 同前、十頁。

(6) 同前、十～十一頁。

(7) 同前、十一頁。

(8) 同前、十四頁。

(9) 同前、十五頁。

(10) 横浜写真とは、主に横浜で外国人の観光土産として開発、量産されたものであり、日本の名所や風俗を写した写真に日本画や水彩画の絵の具で彩色した写真の総称である。詳しくは、前掲石黒著『第6章 珍しい横浜写真』、あるいは小沢建志『日本の写真史…幕末の伝播から明治期まで』（ニコンサロンブックス十二、一九八六年三月）収載「第十一章 横浜写真から東京へ」等を参照された。

(11) 前掲石黒著、十八頁。

(12) 小林弘忠『新聞報道と顔写真——写真のウソとマコト』中公新書、一九九八年八月、二〇三頁。

(13) 木村涼子『主婦』の誕生 婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館、二〇一〇年九月、二六四頁、註(2)

(14) 『モース・コレクション／百年前の日本』（小学館、一九八三年一月）参照。

- (15) 前掲南著、一八〇一九頁。
- (16) 常見耕作「貯金王牧野元次郎と雑誌『ニコニコ』」現代風俗研究会東京の会編『現代風俗学研究』第七号、現代風俗研究会東京の会、二〇〇一年三月、三十八頁。
- (17) 同前、五十三頁。
- (18) たとえば、金子明雄「笑う漱石——雑誌『ニコニコ』と千円札をめぐる」(『国文学 解釈と教材の研究』第四十四巻第十号、學燈社、一九九九年八月)や、紅野謙介「第五章 侵入する肖像写真」(『書物の近代』ちくまライブラリー、一九九二年十月)、岡三郎「捕遺一 第二節の〈雑誌〉と推定される『ニコニコ』について」(『夏目漱石研究』第二巻、国文社、一九八六年十二月)などがある。
- (19) 松永敏太郎編『ニコニコ写真帖』第一輯、ニコニコ倶楽部、一九一二年九月、奥付。
- (20) Optimist Clubについては、現在調査中であるため、ここでは詳しく述べないが、その名の通り、楽天主義をアメリカ全土に鼓吹しようと活動していた倶楽部であった。これについては、また稿を改めて論じる。
- (21) 『読売新聞』一九一一年一月十四日朝刊第三面。
- (22) 松永敏太郎編『ニコニコ写真帖』第一輯、ニコニコ倶楽部、一九一二年九月、奥付。
- (23) 牧野元次郎『ニコニコ全集』弘学館書店、一九二七年十一月、一頁。初出は『ニコニコ』創刊号(ニコニコ倶楽部、一九一二年二月)。
- (24) 同前、三頁。
- (25) 同前、三〇五頁。
- (26) 同前、七十四頁。一九一二年三月に明治大学で行われた講演記録。
- (27) 同前、七十五頁。
- (28) 同前、八十四頁。これは後に「一、今日一日人の悪を云はず、己の善を云はざる事」と「一、今日一日の存命を喜び、稼業を大切に勤むべき事」

- の二条が加わり、最後に「右は今日一日の慎みにて候」という形に発展していき、定型化した。ニコニコ倶楽部で三唱されたのは、この五条の形である。
- (29) この辺りの経緯については前掲常見論文に詳しい。
- (30) 前掲常見論文、四十六頁。
- (31) 同前。
- (32) 荒俣宏「広告画像の伝説」平凡社、一九八九年八月、一七一頁。また、安食文雄は「同誌は毎号、ニコニコと笑う有名人の顔写真を掲載した。これが売り物であった」としている(安食文雄『三田村鳶魚の時代』鳥影社、二〇〇四年八月、二〇五頁)。「笑う写真」が『ニコニコ』の売りであり、それが当時としては特殊なもので、話題となっていたことがわかるだろう。
- (33) 天沼雄吉『棗の花 棗人小伝』清水清秋(私家版)、一九七六年四月、二九〇頁。
- (34) 竹内善作「定期刊行物礼賛」『市立図書館と其事業』第三十九号、東京市立日比谷図書館、一九二七年一月、三〇四頁。
- (35) 村上專精「初め馬鹿にしたニコニコ雑誌」『ニコニコ』第二十五号、ニコニコ倶楽部、一九一三年三月、五十三頁。
- (36) 中野重治「歌のわかれ」『昭和文学全集』第六巻、小学館、一九八八年六月、五六三頁。
- (37) ニコニコ餅とは、「安物の木綿がすり」(『日本国語大辞典(縮刷版)』第八巻、小学館、一九八〇年二月、四四一頁)のことで、通常、子供が着るような廉価な捺染木綿織物のことを指す。
- (38) 天沼熊吉編『牧野頭取講演全集』不動貯金銀行秘書課、一九三〇年十一月、四〇七〜四〇八頁。
- (39) 星野竹里『ニコニコ成功譚』萬里閣書房、一九二八年十一月、一九〇頁。
- (40) 一記者「『夢の世界』門出の記」『夢の世界』第一巻第一号、あきらめ倶楽部、一九一八年四月、一四九〜一五〇頁。

(41) 前掲天沼著『棗の花 棗人小伝』、一二三頁。  
(42) 『朝日新聞』一九二二年十月五日朝刊第四面。

